

2

自然体験・野外活動における指導者育成のコーチングに関する研究（科学研究費助成）

キーワード：自然体験、野外活動、上級指導者、コーチング

1. 研究の目的

本稿では特に「上級指導者とは何か、そしてそれはどうあるべきか」という視点から、その基礎概念について整理、検討することを目的とした。この研究は科学研究費助成事業として青少年教育振興機構青少年教育研究センターとして実施し、研究代表者 岡島成行、研究分担者 関智子の体制で行ったものである。

2. 調査の概要

上記の目的を達成するために、①先進的な指導者育成制度の運営に従事する関係者からのヒアリング調査、および講義を導入した研究会 ②自然体験・野外活動分野の上級指導者の現状と課題を明らかにするための活動状況調査、を行った。

①のヒアリング調査は、「全日本スキー連盟における指導者育成制度について」をテーマに、平成25年3月16日と30日にかけて、同連盟の教育本部長経験者である丸山庄司氏（元全日本スキー連盟専務理事）と平川仁彦氏（元全日本スキー連盟理事）を対象として行った。

また、研究会委員は次の通りである。

自然体験・野外活動における指導者養成のコーチングに関する研究会委員（敬称略）

岡島成行（座長、青少年教育研究センター）
久保田康雄（阿蘇青少年交流の家） 佐藤初雄（自然体験活動推進協議会） 高瀬宏樹（赤城青少年交流の家） 千足耕一（東京海洋大学）
平澤正則（茨城県石岡南小学校） 山岸仁（青少年教育振興機構本部） 山田俊行（トヨタ白川郷自然学校） 関智子（青少年教育研究センター）。

講義内容

(1) 平成25年12月18日

ビジネスにおける指導者育成について
五十嵐朝青氏（株式会社コーチ・エイ、コーチ）

(2) 平成26年1月15日

全日本サッカー協会における指導者育成について

田嶋幸三氏（公益財団法人日本サッカー協会、副会長）

(3) 平成26年1月31日

野外活動・自然体験における指導者育成について

飯田稔氏（びわこ成蹊スポーツ大学、学長）

②の調査については、本研究対象である自然体験活動および野外活動分野の上級指導者を、種目を問わずに横断的に養成しているNPO法人自然体験活動推進協議会（CONE）の登録指導者を対象とし、筆者ら作成による「CONE指導者の活動状況調査」を行った。

質問項目は、①属性 ②過去1年間の指導者養成講習会における活動状況 ③CONEで指定されている指導者養成講習会の8つのカリキュラムのテーマに関する体験の蓄積度 ④今後の課題などについてのコメント、の4つの観点に即したものである。

3. 主な調査結果

1) ヒアリング調査について

全日本スキー連盟における指導員のためのスキー検定の始まりは、1939年に行われた「第1回指導員検定講習会（山形県開催）」だったが、この一連の検定制度は1960年代以降1990年代前半に巻き起こったスキーブーム（最盛期にはスキー人口が1,860万人）にも貢献している。本研究ではこれらの事情に詳しく、かつ指導者育成に主導的に関わった丸山氏と平川氏にヒアリングを行った。

回答内容の要点は、①近年では一般の人に普及するスキーがゲレンデ内での技術習得に偏ってしまったため、ゲレンデ外の雪山に対応できる指導者、スキーヤーの育成が急務である。そのため、全体的にこれからの指導者育成の方針についての見直しが必要ではないか ②体験の場で構築されてきた技術やものの考え方を体系化する視点に留意し、指導者、学習者ともに体験学習の方法を身につける必要がある、というものであった。

2) 調査研究会での講義要旨および検討

①五十嵐氏「ビジネスコーチングによるリーダー開発」

特にエグゼクティブや上級指導者に対するコーチングが有効である。欧米で発展した厳密な意味におけるコーチングとは、コーチングを受ける人への良質な問いとフィードバックに重点を置いて行われている。指導経験の

長い指導者には、特に自らの手によって自らの考えや無意識の部分掘り起こし、アイデアとしてあらためてアウトプットするプロセスが自己成長にとって重要である。

②田嶋氏「日本サッカー協会における指導者養成システム」

日本サッカー協会には、第一にサッカーを愛する仲間を500万人にするという目標がある。協会はこれまで「代表チーム、ユース育成、指導者育成」の三位一体で活動してきた。

指導者には幅広い視野、教養が必要である。特に論理的な思考能力と言語表現は、サッカー自体に大きな影響を与えており、必要不可欠なものである。

S級コーチ（プロチームで指導ができる資格）の教育カリキュラムで印象に残ったことを受講者に聞くと、野外プログラムとディベートのインパクトが高い。勉強だけではなく、サバイバルや生き抜く力があるかどうか、指導者育成の世界基準として問われる。

③飯田氏「野外活動・自然体験における上級指導者養成について」

日本もアメリカでもそうだが、指導者養成を行う機関にはひとつは大学、もう一つは民間団体がある。

指導者養成の事例として、びわこ成蹊スポーツ大学では野外スポーツのコースがあり、専門課程として行っている。カリキュラムの一つの特徴は実践を重視していることだ。

アメリカのインディアナ大学は、総単位数に関しては日本との違いはあまりないが、インターンシップに多大な時間をかけるところに特徴があり、そのみで30単位取得することを課している。

民間の指導者養成では、自然体験活動推進協議会（CONE）が4段階の指導者の水準を設けている。

指導者養成、特に上級指導者はより幅広い方々が多数参加するような実態、状況を作らなければ必要でなくなる。今、最も日本でしなければならないことはいかに参加者を増やすということではないか。

3) CONE指導者の活動状況調査

CONEに登録している上級指導者であるCONEトレーナー312名を対象に、①属性 ②過去1年間の指導者養成講習会における活動状況 ③CONEで指定されている指導者養成講習会の8つのカリキュラムのテーマに関する体験の蓄積度（初級、3年程度の有指導経験者、5年以上の有指導経験者を対象にした育成を行

う場合の指導力への自信）④今後の課題、について調査を行った。

有効回答者数117名（有効回答率37.5%）から得た主な結果は、次の通りである。

③の体験の蓄積度（指導力への自信）は、指導経験年数15年未満と15年以上のグループで異なる部分があった。具体的に、15年以上の指導経験者群の方が15年未満の指導経験者群よりも体験の蓄積度が豊富であると評価しているものは、5年以上の有指導経験者を対象にした場合のみに表れた。初級指導者と3年程度の有経験者を指導対象とする場合は差異がなかった。その中でも「自然の理解」「対象者理解」「自然と人、社会、文化とのつながり」の3テーマについて、15年以上の指導者経験群が15年未満の指導者経験群よりも指導力に自信を持っていることが明らかになった。このことから、上級指導者が5年以上の有指導経験を対象に特に教養に関わる部分を扱う際には、指導力の奥深さによる影響力の差異が生まれることがうかがえる。

4. まとめ

今回のヒアリング調査、専門家による講義、アンケート調査、委員会での議論などを総合的に考察した結果、上級指導者養成の基本的な方向性を確立するに当たっては次の5点を基盤とすべきことが明らかになった。

①上級指導者は、単に技術を教えるだけでなく、指導哲学、理念をしっかりと持ち、広い視野をもつべきであり、一般教養の習得にも心がけるべきであること。

②指導する際に、論理性に優れていなければならず、特に言語技術の習得が望まれる。

③指導者養成にコーチング技術を導入すべきである。コーチングは自覚させることが目的であり、教えこむこととは異なる。

④CONE指導者アンケートの結果から、上級指導者が時間をかけて構築すべきものとして、技術を伝えるための基本哲学及び幅広い視野を持つ教養の修得が挙げられる。

⑤自然体験活動の指導者養成制度の全体像を再構築し、その中での上級指導者の位置付けを明確にする。

⑥上級指導者には資格取得後、活動する場が必要である。そのためには自然体験活動の普及が不可欠。指導者養成と活動の普及とは車の両輪の関係にある。

（文責 青少年教育研究センター主任研究員 関 智子）